

下商物語

講堂のはなし

教諭 林 俊行

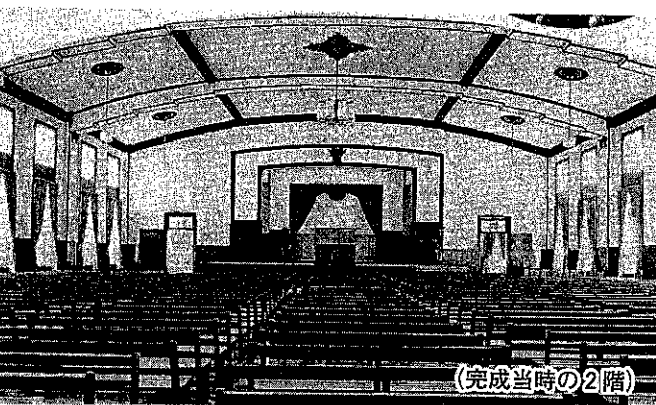
本校には、体育館と講堂がそれぞれにありますが、公立の高校では珍しいと思います。恐らく、ある程度の古い歴史がある学校でないと講堂という建物はないと思われまふ。ちなみに本校で現存する建築物の中で最も古いのは講堂です。本校創立五十周年記念行事の一環として、当時では関西一の威容を誇る大講堂が昭和十年の五月十九日に落成式が盛大に行われたようです。

当時の記録によれば、建築費用（設備・記念式典費も含む）は、約八万円、そのうち約五万円は同窓会（全国の同窓生約十五百名からの寄付による）、父兄会（現在のPTA）による募金収入によるもので、残りの約三万円が市からの拠出であったようです。従って、多くの同窓生からの浄財で建築された記念すべきものです。講堂は本校のシンボルといっても過言ではないようですが、相当の年数が経っていますので、耐震上の問題など今後そのあり方について

も検討がなされているところです。ところで、完成当時の講堂は次のように本校百年史の記録に残っています。「本館建物の隣に二層楼になる近代式鉄筋コンクリートの大建築。内部は、プラスチック塗仕上げの白色に輝き鉄筋面開きの硝子戸を洩れて入る燦々たる外光と相映し、見るからに清楚な構造美を持つている。正面の左右両側には高橋是清翁と平沼騏一郎の大書額が掲げられ、天井には豪華な大シャンデリアが光明を投げかけ、千三百余を包擁する腰掛が整然と並んでいる。一階部分は、百名収容できる模擬実験室や図書収蔵室・閲覧室などがある。更に、講堂西側の丘の斜面には創立五十周年記念講堂の建設碑が立ち母校愛の結晶である大講堂を注視しつつ、水く下商歴史のうえにこの記念すべき事実を物語らんとしている。」

数年前に映画の撮影（豊浦高校出身の佐々部清監督作品「出口のない海」現場として、この講堂が選ばれたのも市内に現存するこのような歴史的建造物が少なく非常に貴重されたのも事実で本校のシンボルとして大切にしなければならぬものだと感じています。講堂にまつわるエピソードとしては、工事期間中に歴史的な早魃になり水の補給ができなくなり、工程が遅れて本来の創立五十周年記念日に間に合わなかった結果、翌年に落成式を行うことになったこと、天井にあった豪華なシャンデリアが戦争中に金属類を提供しなればならぬ事態に供出してしまったことや前述した高橋是清の書額が昭和四十年代に窓の閉め忘れによって風雨にさらされ劣化し廃棄される事態を招いてしまいましたが、惜しまれなかったことなどがあるようです。

現在でも、ホールは学年集会や部活動（バ



ドミントン部）に日々利用され、一階は昭和五十八年六月から営業を始め生徒に親しまれている食堂・購買部・部活動（吹奏楽部）の部室として全校生徒・職員から愛されながらも下商を見守っている貴重な存在です。大先輩方から当時の話しを伺うと、当時の講堂は学校の建物ではあるが多くの市民が集う場でもあり、下関市民から愛された象徴であったと目を細めて懐しく語られました。

講堂お別れ会

講堂お別れ会の記録
教諭 林 俊行
創立五十周年記念事業の一環として建築された講堂（昭和十年・一九三五年完成）が、老朽化のため解体されることになり、六月二十五日（土）にお別れ会が開催された。本校にとりて現存する建物の中でも最も古く、永年に亘って数多くの生徒たちの青春の舞台となった建物であり、特に戦後は地域のいろいろなイベントも開催されるなど市民の方々にとっても思い出深い記念の建物であった。会の内容は、山本貴司校長の挨拶から始まり、藤田太一郎同窓会理事長挨拶、来賓を代表して中尾友昭下関市長挨拶と続き、本校郷土研究同好会員による講堂完成当時の貴重な資料を取り入れた「思い出のスライド」上映（生徒による解説も）、各代表者による「思い出を語る会」（①建築・竣工当時 原田芳正、早田八郎両氏（昭和十二年卒）、宇都宮 博氏（昭和十年卒）、倉本勝民氏（昭和二十八年卒）②バドミントン部卒業生 日野雄二氏（昭和四十六年卒）③吹奏楽部卒業生 和田健資氏（平成元年卒）④出口のない海）の撮影、渡邊忠彦教諭、連絡事項（同窓会当番幹事より、学校側から新制服の披露、参加者全員による「校歌斉唱」（吹奏楽部演奏）、最後に「記念撮影会」（講堂二階ステージ）、散会といった内容であった。

会場には、講堂が完成するまでの記録や出口のない海撮影時の写真展示や本校の歴史などの貴重な資料の展示もあり、報道各社（新聞各紙・NHK等）も多数来校された。特にNHKは、夕方夜のローカルニュースにて紹介され大きな反響があった。参加者は、来賓（三名）、旧教職員（十七名）、同窓生（四十五名）、現教職員（十七名）、在校生徒（五十四名）、生徒会、バドミントン部、吹奏楽部）の合計一三六名の方々が出席いただいた。その後、七月中旬から解体工事が本格的に始まり、現在は解体工事が完了してさら地となっており、平成二十五年度春の新講堂完成に向けて間もなく基礎工事が始まるうとしている。完成が待ち遠しい限りである。



平成23年